



秋田県と「ごんぎつね」と説明力

神戸大学経済経営研究所

教授 下村 研一

私は秋田県を一度も訪れたことがないが、ここ数年とても興味を持っている。それは秋田県が小・中学生の国語と算数・数学のテストによる「全国学力・学習状況調査」で毎年上位にランクされ、さらに沖縄県が秋田県と教員の人事交流を持ったところ、翌年の調査結果が飛躍的に向上したことを知ったからだ。

秋田県と沖縄県には、地理的な遠さはもちろん部外者には想像がつかない気候の違い、そして生活習慣・文化の違いがあるかと思う。それを越えて、子供たちのために人事交流を提案した沖縄県とそれを受けた秋田県に敬意を表したい。この両県の英断は、秋田県の教育の方法が秋田で生まれ育った子供たちだけに有効なのではなく、一般にも有効であることが十分期待されることを「全国学力・学習状況調査」という客観的データで示した貴重な社会実験と言ってよい。

私はさらに秋田県の先生方が全国共通で使う教材をどのように教えているのかを知りたかったが、その情報にアクセスする機会には恵まれなかった。しかし、それは最近になって意外な方向から実現した。小学4年生の国語の教科書に載っている「ごんぎつね」を題材にしたある秋田県の先生による説明力指導の研究報告書が偶然検索に引っかかったのである。題材の原文の一部を抜粋する。

その小さな、こわれかけた家の中には、大ぜいの人が集まっていました。よそ行きの着物を着て、こしに手ぬぐいを下げたりした女たちが、表のかまどで火をたいています。大きななべの中では、何かぐずぐずにえています。

「ああ、そう式だ。」とごんは思いました。「兵^{ひょうじゅう}十のうちのだれが死んだんだろう。」

《中略》

「ははん、死んだのは兵十のおっ母^{かあ}だ。」ごんはそう思いながら、頭をひっこめました。

(新美南吉「ごんぎつね」、光村図書出版『小学4年 国語 下巻』)

この報告書によると、実際の授業で「大きななべのなかで煮えているのは何か」について子供たちは議論をしている。最初に出された答えは「兵十のおっ母」。異議を唱える子、疑問に思いつつも「兵十のおっ母」の可能性を完全には否定しない子、いろいろである。以

降話し合いは子供たち同士でなされ、推論の結果大きな鍋で煮ているものは葬式に来たお客用の料理であるという結論に達したそうである。そして、報告書の執筆者である先生は、自分の考えに迷いが生じたとき、自分の考えを他者の考えと擦り合わせることで発見が生まれ、その発見を他者に伝えるという過程を経て、子供の説明力は成長すると結んでいる。

素晴らしい！報告書を読み、私は思わずつぶやいた。なぜなら、今から45年前私も小4の国語の時間に「ごんぎつね」を読み、「大きななべで煮えている何か」は「兵十のおっ母」だと思ったからである。そして、「自分の考えに迷いが生じ」「自分の考えを他者の考えと擦り合わせ」ようと挙手した。担任の男の先生は私を指名した。私は起立し半ズボンの両足を真っ直ぐにそろえ元気よく言った。

「なぜ兵十のおっ母を煮たのですか。」

先生はほほ笑んで「煮たのは葬式に来た人たちに出す食べ物だよ。」と答えてくれたが、その声は4年2組の級友たちの爆笑でほとんどかき消された。当時の人気テレビ番組「8時だよ！全員集合」のコント「ドリフの国語算数理科社会」のワンシーンのようだが、先生は私をメガホンで叩くこともなくほほ笑み続けながら即座に次の段落の話を始め、「ごんぎつね」の本筋に殆ど、いや全く関係ない「大きななべで煮えている何か」についてその後振り返ることはなかった。

考えるに説明力、現代風では「プレゼンテーション力」、の重要性が日本で広く認識されたのはここ十数年のことと思う。45年前小学4年生に対して説明力の指導は高度教育で、物語文の授業なら、漢字の読み書きを覚え、言葉の意味を理解し、あらすじを押さえ、登場人物の意識の流れを把握することが全てだったのでと考える。「ごんぎつね」で生じた些細な疑問からも説明力のトレーニングが受けられる今の秋田県の小学生は間違いなく教育環境に恵まれている。

「ごんぎつね」は1956年度の大日本図書の小4の教科書に初めて登場し、掲載年数は60年を超える。主に小4用に掲載され続け、80年度以降は全出版社の小4の国語の教科書に載っているそうである（朝日新聞2016年6月24日）。私は今後も是非掲載を続けてほしいと願う。そして、担任の先生は「大きななべで煮えている何か」が「兵十のおっ母」ではないかと思う子供がいたら、是非議論の時間を設け、説明力のトレーニングまで結びつけてほしい。「そんな読み方をするのはあんただけだ」という声が聞こえてきそうだが、一度原文を読んでみられたい。新美南吉先生は普通の小学4年生40人中少なくとも一人は「兵十のおっ母」だと思ってしまう書き方をなさったと私は今でも思うのである。